

Q:簡単に流せるようなものは、そのまま流せばいい
と思うのですが、そうではなくて、一回流しても
また戻ってくるようなものについては、

A: はい。

Q:他のボールが増えますけど、その、そんなんじゃ
嫌だとか、

A: うん。

Q:こんな修行しているのにそんなんじゃダメだとか、

A: うん。

Q:その原因は慢だとか、

A: うん。

Q:いろんなボールが増えますけど、

A: はい。

Q:増やすことは別に悪いことじゃなくて、そこはむ
しろ増やして、それを増やした状態で流せばいい。
そうすれば、戻ってこない、再来しないんじゃない
か、と思って聞いていたんですが、そういう解
釈でいいのでしょうか。

A: あー、いえ。それは気のせいです。「それは何と
かだ」「こうだ」「ああだ」「おかしい」というふ
うに、たくさん別のボールを投入することで、言
わば、無理矢理引っ込ませようとしてるような感
じなんですけど、そのときは引っ込みます。その
ときは引っ込みますが、そうやってムキになって
いることが原因となって、必ずそういった無理矢
理引っ込ましたものは、またやってきます。

Q:ボールを増やさずに、ただ流してしまうと、やは
りそれはそれでまた戻ってくると思うんです。

A:それが何なのか、気づいてないからです。気づい
ていて流していたら、戻ってきません。

Q:それを気づくために、

A: はい。

Q:そういうボール、

A: うん。

Q:これが、慢が原因だとか、

A: はい。

Q:そのときに体にどういう影響が出てくるかとか、

A: はい。

Q:そういう考えが出てきて、

A: うん、うん。

Q:それは別に、

A:悪いことではない。

Q:悪いことではない……。

A:重要なのは、難しいと思うんですけど、「これ
は慢だ」と思っていることとか、「原因は何だ」
「体への影響はこうだ」って考えているのが、仰
ったように、ボールが増えていくでしょう。
そのボールにも気づいていて、それが流せている、
ということが重要なことなんです。それができて
いれば問題がないです。

ただ、あるボールが出てきて、何かそうだな……
誰かに自分がバカにされて、「気に入らないな」
という感情が出てきた、として、「あ、これは慢
の気持ちだな」というふうに分かった、として、
その「慢だな」というふうに分かっているのは、
「一つのボールだ」というふうに認識できていて、
もっと言えばですね、これはどういうボールか、
そのように、「慢だって分かりたい」という種類
のボールなんですよ。

「自分のことを理解したい」とか、もっと言えば、
理解することを通じて、「こういった嫌な感情が
現れないようにしたい」というような気持ちがそ
こに働いているじゃないですか。ある種の微妙な
煩惱なんですよ、「分かりたい」というような。
という、感情が、働いているんだな、というの
を見ていられて、流せていけば、問題がない、と
いうことです。そこがちょっと難しいところだと思
うのですけれど。

つまり、「外からいろんなボールが流れてくるこ
とを、客観的に見ている」というふうに言ってい
るのは、世俗的な意味での客観性というようなこ
とで言えば、ある感情が出てきた、「あ、これは
慢心なんだな」と分析するのは、なんとなく客観

的な感じがしますでしょう。そのことを余所から理解しているような。ただ、今言っているようなレベルの客観性というのは、そうではないんですよ。ただありのままに、何の判断も入れず、純粋に気づいている、ということです。

ところが、「これは何の感情だろう」と分かろうとするというのは、純粋に気づいているのではなくて、「分かりたい」という感情を含むんですよ。もしくは、分かることを通じて、「こういう変化が起こるといいな」というような欲望が付随したりして、ですから、感情判断抜き、純粋な気づきではないんですよ。

純粋な気づきは、純粋な気づきではないものを、ただ全部気づいている必要があって、純粋ではないものを全部気づくための、純粋じゃないボールの一つが、「分かりたい」とか「これはこういうものだ」と分析しようとする気持ちとか、そういったのがすべて純粋な気づきの対象となる、ということですね。

今朝の法話の中で、「すべての心の川を流れてくるボールに気づいていきましょう。ただし、うっかり気づき忘れているときにこそ、そのボールの中にはまっていますよ」という言い方をしたと思うんですけど、「あ、これは慢だ」と分析する気持ちが、そういう感情が働いていることを、対象化して気づいてないときに、気づいてないから、その分析する気持ちの中に溺れてしまう、ということです。

分析する気持ちというのは、人間が溺れやすい感情の中の、最たるものの一つなんじゃないかな、と最近すごく思うところがあります。というのは、分析してるのは客観的であって、見つめている、というつもりになれちゃうからです。

実際は、客観的ではないですし、感情的ですし、概念をいっぱい用いているので、ねえ。けれども、概念を超えなきゃいけないんですよ、究極にただ気づいている、という状態に行くには。

ただ、「分析する」という概念の中にはまっていて、ただその分析は有益なんですよ。有害な感情と有益な感情があるとすれば、今起きている状態がどのような種類の、分類上、感情であって、原

因はこういう感情に突き動かされているんだな、と理解することは、大変重要なんですよ。

ただ、大変重要であるうえに、有用、役に立つだけに、それには溺れやすいというか、しかも本物の客観性ではないんですけど、世俗的な意味でなんとなく、客観的な感じがするので、それを気づきと取り違え、溺れているのに溺れていないと勘違いしてしまう、勘違いの、巨大な要塞の一つだと思います。

そのようなわけで、有益なんですけど、その有益な分析というのが働いているときに、分析の外に立っている、心の眼差しが確保できるようになることを、ゆっくり練習してほしいな、と思います。他方で、そのためのヒントとしては、そのように分析しているのが、「自分の意志でしている」という気持ちがあればあるほど、それに執着してしまいがちなのです。分析しようと思った理由は、おそらく、そういった概念をこの道場で学んだとか、何らかの形で学んだ、というのが原因にあって、その学んだことを生かして、「起きたことを分析したい」という欲求は、条件が揃うと勝手に起きてくるんですよ。条件が揃わないときは、そういった気持ちは起きないんですけど。

というようなわけで、「そうするといいな」という条件づけが心の中にできていたら、ある条件が揃えば、勝手に分析したくなるんですよ。習慣づいてきて、勝手にそのように理解したくなります。そのような、勝手に分析したくなる習慣は、ある意味良い習慣なので、身につけていただきたいと思います。身につけていただきたいと思うからこそ、そういう分類をお伝えしたり、理解する方法をお伝えしたりしているんですけども、他方でそれは、いいことばかりではありません。いいことではない、最たるものの理由は、三つくらいあると思います。

一つは、あなたも仰ったように、ボールが増えます。ボールが増えるということは、それに気づいていなきゃいけないものの数が増えるので、増えた分析的ボールにうまく気づけない場合に、いつの間にか溺れている可能性が高くなります。

二つには、それは溺れていることに似ていますが、

客観性にとっても似ているように見えますので一見、それが気づきそのものであるかのように勘違いして、そうやって分類したり、言葉を貼りつけたりしているとき、「自分は気づいているんだ」というふうに一回勘違いしてしまうと、本物の気づきそのものは多分、半永久的に分からなくなります。本物の気づきそのもの、というのが、それはそもそも、それが分かったときに、その莫大な価値が分かると思いますが、その、圧倒的な威力と圧倒的な安全性です。その圧倒的な価値、を理解することを、そこに辿り着くことを妨げます。「あ、これが客観性で、これが気づいてるってことかな」って、勘違いしてしまう足場になってしまうような。

三つあるって、その三つって言った瞬間には思いついていたんですけど、喋っている間に忘れてしまったんですけど……まあ、その二つくらい意識できていたら十分かな、と思いますね。

そういった、デメリットがあるにはあるんですけども、理解しているということを通じて、理解された、洞察されることを通じて、それらへのとらわれから離れるという作用があります。それは良いことなのです。それはただ、心の中で実は、一見起こそうとして起こしているように見えるんですけども……あ、三つ目に言おうとしていたことを、それでたまたま思い出しました。それは、私が、やっているような気がしがちなもの、最たるものなんですけれども、私が選んで分析しているような気がしちゃうんです、なんとなく。選ぶ、分析する自由と分析しない自由があって、私がこれから分析しようと思って、自我がそこにあって、自我というものが、今起きていることを選んで分析しているように一見、見えがちなんですね。それに対して、いきなり巨大な音がバーンって鳴って、ウツてびっくりしたら、それは、「私の意志ではなく、勝手にびっくりしただけだな」と分かりやすいんですけど、ところが、世俗的な意味で、主体性があると感じられていがちなもの、というのは、実際は主体性なんかなくて、ただ、「そういった分析をするのは良いことだ」という、癖みたいなのが集積していった結果、分析すると、

「これは特異なことが起きそうだ」という欲望にとらわれて、何がしかの起きる対象に接触したら、それを勝手に分析したくなるという感情、つまりボールは、上流から勝手に流れてくるんですね。それはつい、「私が私の意志で、今、ゼロから生み出した」という気になってしまいがちなので、それもデメリットがあるんですけど、というようなデメリットを踏まえつつ、でも、言い換えれば、「『あ、これは慢だ』っていう、分析をしようとしているボールが今、流れてきているんだな」ということを、こちら側にスツとひいて、見ていられるならば、面白いことに、元々の、流れてきていた感情のボールにもとらわれなくなりますし、それを分析しようという気持ちのボールにもとらわれなくなりますし、それに関係して体の状態がこうなってるな、と分かろうとする気持ち、それも一つの欲望です。その欲望にもとらわれなくなったときに、心がものすごく自由であることを体感すると思います。

それらに染まらず、引きずり回されない、という感じです。と同時に、それらは効果を発揮します。効果は発揮するんですが、それが心に……、突っ込んだことを本当に突っ込んだところを見ていこうとするときに……、普通の頭の操作のレベルで、分析したり分かたり理解したり、知識のレベルと言ったらいいかなあ、そういう言葉のレベルで、何がしかのことを知覚したり、認識したり、することでは、まあ、片付かないんですよ、心のことっていうのは。

一見するとそれでなんとなく理解して、「すっきりした」と感じることもありますし、「本当に流れた」と感じることもあるんですが、でも、そう「流れた」と感じた割には、結局のところ、その心の傾向の根本みたいなのはいつまでもあって、ちょっと形を変えて、何回も結局出てくるんですよ。それそのものは出てこなくても、対象を変えたりしてずーっと出てくるんですよ。その……葉っぱが枯れただけで、根っこが残っていてずーっと出てき続ける、といえますかね。その根っこそのものが、滅ぼされる、というためには、そういった、言葉とか知覚とか概念とか概念操作とかを

超えたようなところで、今起きていることに全く執着しないような心の次元、に降りていく必要があるんですね。それもありありと気づいている。この「ありありと気づいている」というのが、さっきも申したように、体験しないと、その価値は多分分からないですし、それ以上に価値が分からないのは、全く執着していないときの心の状態というのは、全く執着していない状態というのか、ないし、少なくとも、半分くらい執着していない状態というのを一回でも体験しないと理解できないと思うのですが、ただ、今朝から、「何にも染まらないで、そこには名前もないし、概念もないし、国籍もないし、性別もないし、言語もないし、どんなボールが流れてきていても全く染まらない領域が心の中にある」と申していましたでしょう。

何らかの形で、どれかのボールをちょっとでも触っている以上、この、どんなボールにも絶対染まらない場所、というのは分からないんですよ。というのは、ボールに興味を持っていて、「分析する」というボールにでも興味を持っていたら、そのボールに心は染まっているでしょう、その状態では。染まっているので、「あ、この場所は染まらないんだな」という場所は分からないですよ。どんなボールにも染まらないで、流していられるときに、「あ、本当に染まらないんだ」というのが分かります。その場所に心を置いていたら、たとえ、どんな感情が、どんなに激烈な感情であろうと、些細な感情であろうと、この染まらない場所からすると、全く関係なくなってしまう。それが、そこに流れていても、結局それは、この場所って今、仮に名付けている場所に、全く届いてこないし、響いてこないし、何の影響も与えてこないの、全く完全にどうでもよくなってしまいうんですよ。

分析も生じます。理解も生じます。しかし、理解は全くどうでもいいし、分析も癖がついていたら、分析の癖も生じるんですが、ある種の分析は良い癖ですが、その良い癖でも、まどろっこしいんですよ。いろいろ頭の中で考えるので、それは。ただ、そのまどろっこしいこと全部、どうでもい

いんですよ。全く「ここ」には染みわたってこないからです。

この何も拾わない場所には、何も響いてこないし、何の影響も与えてこないの、それゆえ、その場所はものすごく、仮に言えば、安楽なんですけど。安楽、絶対安定なんですよ。

Q：(首を傾げる)

A：絶対安全だし、つまり今後、たとえ人生でどんな出来事が起きようと、決してここには影響が来ないし、どんなボールが仮に流れてきても、ここが、あなたの首の傾げどころだと思うんですが、多分あなたは、嫌なボールが流れてこなくなったら、安楽だと思ってるんですよ。

Q：(うなづく)

A：ですよ。 「びっくりする」ということがなくなったり、「腹を立てる」ということがなくなったり、「慢心が生じる」ということがなくなったら、安楽であろうと思っているんですよ。

それは確かにそうなんですよ。いつか、すべての煩惱が滅尽されたらそうなりますが、でもあなたの人生の中で、全ての煩惱が滅尽するところまで行こうと思ったら、いったいどれだけ苦労をして、いったいどれだけすべてを投げ捨てなければならぬか、というか、本当にもしそうしたければ、すべてを捨てて、二十四時間、修行以外全くしないという生活を、死ぬまで続けるくらいの決意が必要でしょう。

そして多分、その決意をしてもなおかつ、それは達成されないくらい困難な道のりです。その道のりも価値のあることではあるんですけども、もう少し、まあ、ある意味それと同じくらい難しい場合もあり得ますけれども、一見それと比べると、非常に分かりづらいんですが、裏道があるんですよ。その裏道と申しているのが、それらの感情は、そこに流れてきます。流れてくるんですけども、全くそういったものに影響を受けない心の領域を見出せば、心の問題は、半分終わりです。

なぜ終わるのか、という、慢心が出てきていても、その領域を見出して、そこに心を置き続

けていれば、慢心は全くそこに影響を及ぼさないからです。つまり、ないのと同じだからです。

慢心がなぜ、心に影響を及ぼすか分かりますか？

「それは私だ」と思い込んで、それに同化するからです。イライラがなぜ、心に影響を及ぼすかという、イライラが生じた直後に、「それを私だ」と思い込んで、それに同化するからです。なぜ、欲望してハアハアするのが心に苦しきをもたらすかという、欲望が生じたほんの一瞬後に、「それが私だ」とそれに執着して、そしてそれに同化するからです。もちろん、慢心が苦しいのも、「慢心を起こしているのも私だ」と思い込んで、それに同化するからです。それに感情移入し、はまり込むからです。

ですが、そこには大なる錯覚があって、それは私が起こしていません。条件に応じて、勝手に刺激が入力されるとそのように心が、心という魔術師が、反応をさせているだけです。というところに、心をよくフォーカスさせていくと、そういった感情が生じてくるのを、「これが私だ」と思って、執着しないで済むようになってきます。それは徐々に徐々に、ゆっくり時間をかけてだんだんと、ですけれども。

そのように、執着しないという練習を、今主眼に置いているのです。理解し、分析するという練習もしていますが、並行して、していますが。「執着しない」という練習は、「分析する」とか「理解する」ということに対しても適応される必要があります、さっきから申しているのは、「分析しているなあ」ということを客観視しておいて、「分析しているみたいだけど、まあいいや」と置いておくのです。「理解しているな」というのも見ておくのです。

何のためにやっているのか、という、いろんな意味が、何にも執着しないようにする、という練習でもあるんですけれども、わたくしの一つの意図としては、それを繰り返しているときに、「執着しない状態になる」とか「いろんなボールが流れてきても、それに染まらない状態になる」というのとは実はちょっと違って、この心の中に、元々です、どんな感情が流れてこようと、

全然それに影響を受けもしないし、染まりもしないし、全く影響も受けず、ただやさしくすべてを知っている」という心の力があるんですよ。埃をかぶっていて、全然働かなくなっているんですけど、すべての人の中で。

それをただ、埃が払われて、働き出すようにしたい、だけなんです。その働きに近いものをイメージで皆さんに提供して、そのイメージのところ、心をシンクロさせていてもらう時間を長くつけて、それをやっているうちに、その心の力がいきなりパーッと光り始めるようにしたいだけなんです。光り始めるようにしたいだけで、でもそれは元々、内蔵されているんです。

その内蔵されているものが、どのようなものか、たとえば、今のイメージの区分で言えば、川の流れの中には全くないんです。川の流れの外の川岸のほうにあります。

ところが、「川岸のほうにあります」というのは観念ですから、それはボールです。それは川を流れていきます。というような具合に、川岸についての、すべての説明は川を流れていくので、川岸のほうには何にもないんです。

この「何にもない」というのは、ほとんどの人の観念の中で、「全部の流れを止めたら、何にもなくなるだろう」と思っています。呼吸に集中していったときに、川の流れが止まれば、何にもなくなります。それはこっち側にも何にもないし、川の流れにも何にもなくなっちゃうので、見ている対象がなくなるので、「何にもなくなったな」と思います。

ただその場合は、一時的に「何もない状態が起きたな」と認識するだけで、またそれが終わると、何かがある状態に戻ります。

ということではなくて、たとえどんなものが今、流れていても、どれだけ慢心が流れていようと、どれだけ欲望が流れていようと、どれだけイライラが流れていようと、それは川を流れているだけで、「こっち側には何にも流れてないな」というのが分かってくる、というのが重要なことです。止まったからという条件つきでなくなるのではなくて、いつも、何もないのです、こっち側には。

いつもこの心の中には、何かがあるけど、それを「何もない状態にしよう」としているわけではなくて、この、裏道と申しているのは、空洞の領域というのが心の中に広がっていて、しかも、あたかも狭いそういう場所があるかのように仮に表現していますが、これが見出されてくると、狭いも何も、全部それしかない、んですよ、実は。そっちのほうが圧倒的に広くて、その中で、ポツポツとボールが流れているだけ……まあ、それはちょっと置いておきましょう。そこまで突っ込んでゆくのはまだ早すぎると思うので、それは置いておいて、話を巻き戻しますと、どんなものが流れてきても、こっち側には何にもなくて、何にもないということは、絶対安全なんですよ、そこは、常に。

たとえ、慢心が流れていようと、そこは絶対安全なんですよ。ここには何も流れていないから。たとえ、欲望してハアハアしていようと、それを掴んで、「それが私だ」と思ってしまおうと、苦しくなってくるんですけど、その欲望が生じている真っ最中に、この場所は何にも起きていないから平気だし、全然欲求はここまで及んでこない。そっちを流れているだけで、ここは何にも起きていないから、欲望している真っ最中に、全然ここは欲望していないから、もう全く安心、欲望を消したから安心なんじゃなくて、欲望はそこにあるみたいだけど、全然関係ないから、絶対ここは安定で、全く関係ないな、という感じです。

そんな塩梅で、仮にですけど、大地震が起きて、こういうことをしていると、大地震が起きて、「びっくりする」というボールも流れてくるかもしれませんが、それが全くどうでもいいんです、ここにいたら。どれだけびっくりしていても、ここはびっくりしていないから関係ないじゃない。

その場合、この「びっくり」というのは完ッ全にどうでもいいので、じゃあ、全く心に引っ掛かりゼロなんですよ。流す、流さないとかじゃなくて、もはや、全く関係ないので、ポンッと消えてしまふんですよ。そのように、ポンッと、びっくりさせておいたらいいんです。そのとき、全く関係ないので、ポンッと消えてしまったときに、

「びっくりする」というような種類の心の根っこがどんどん消えて行っちゃうんですよ。

流れてくるけど、全く関係なくて、全くどうでもいいので、心が、そのことを、脳みその中から興味をなくしてしまって、delete していくようなことが生じていく、ということです。ですので、二つの意味があります。ものすごく大きな。

一つには、この領域は絶対安定で、何も起きない……まあ、エネルギーに満ちているという意味では、あらゆることが起きているんですが、その領域は。ただ、具体的な現象は何も起きずに、そこから具体的な現象があらわれてくるときは、あくまでも川の中のボールとしてそれが生まれるんですよ。

たとえば、この領域に心を留めていると、ものすごい活発な元気さとかが湧いてきますが、その元気さというのはボールなんですよ。ボールが流れてくるだけで、元気さすらこの領域には起きないんですよ。

というような感じで、何か具体的なことが起こるときは、すべて川を流れてくるだけで、こっちでは本当に何も、常に、何が起きていても、その真っ最中に何も起きていないので、絶対安全だし、「何が起きてても平気だな」という平常心が身についてきます。

と同時に、その平常心をベースに、「それは何もない、ということではない」というのは、繰り返し申しているように、「ここ」に何もなければ、目の前にはいっぱいあります。

つまり、目の前に川があって、川の中をどんどん流れてくるので、そこはいろいろ流れてくるのですが、「ここが絶対安定」というのが分かれば分かるほど、絶対安定なところから見ているわけですので、どんなものが流れてきても、こっちには入って来ない、とすれば、流れてきているものに対し、興味を持たずに、「ほんと、どうでもいいな」という感じで見ていられるんですよ。

というふうに見ていられるので、たとえ何が流れてきても、全く興味がないので、ポンッ、ポンッ、ポンッ、ポンッと全部、手当たり次第に消えていってしまいます。

というようにして、先に、「煩惱を全部消そう」という、非常にうまくいかなさそうな道ではなくて、先に、とにかくもう、「絶対安定」というところに、ポンッて行ってしまおう裏道です。

絶対安定なところに行ってしまったら、煩惱のことは、今までのように心を振り回すことのできない、ただのガラクタみたいなものになってしまうのです。

これまでは、煩惱が非常に魅力的なものに見えていて、慢心もなぜ、心を引きずり回すか、という、ある意味魅力的に見えているんですよ。

欲望もなぜ、こんなに強いのか、という、とても魅力的なものに見えていますし、怒りというものも非常に力があって、実体的であって、それがこの心にとってある意味魅力的に感じられているので、心が足場がなくてさまよっていて、何か足場になるものが欲しくてしょうがないので、そういうおいしそうなボール、というか、流れてくるおいしそうな果物というか、煩惱という果物に興味があるので、それに吸いついていって、執着するので、なかなかどうにもならないんですけど。この絶対安全領域が見出せさえすれば、「あ、ここがもう絶対安全なところだから、他に何かがあるわけじゃない」という、他の何かの流れが来て、「ここに全く影響を及ぼしていないから意味ないじゃない」と分かってきたら、もう煩惱のボールがおいしそうな感じに見えなくなってくるんですよ。

先に、この「絶対安全で、もう完全に安心しちゃった」というところに行ってしまうと、つまりこれが、煩惱はいまだ断たれていないんだけど、知っている人には、まあ何とかかんとかかんとかかんとかって言われていることですね。

煩惱はいまだ断たれていないのに、先に完成されちゃうってことですね。裏道、なんです。

先に完成されたところから、もう煩惱はガラクタになってしまっているんで、流れてくるままに、ポヤーンって、ただ気づいて、眺めていてやれば、流れてくる都度に、全く興味がないうえに、純粹な気づきで、興味がないので、ただ何の評価もせず、ありのままに見ていられるので、出てくる

都度にポシュッ、ポシュッと消えていくに任せて、あとは時間をかけて、この絶対安全な場所から、ゆっくり時間をかけて、心を練って行って、そうやって気づきを向けて行って、煩惱を洗い流していく、というのを続けていけばいい。——というような意味合いで、この、分析にもとらわれない、概念とか理解しようとしている気持ちも、それも一つの、微妙な欲求の表れの一つとして気づいていて、その中に、心を溺れさせない、ということの重要性は、そういうところにあります。

とても長々と、こうグルーツと回ってお話をしてみましたが、と同時に、一応、誤解のないようにまた付言しておけば、心にはいろんな癖がありますけれどもその中でも、「今、この心の中はどういう状態になっているのかな」と理解しようとする、という心の癖は、それはさっき申したようなデメリットもありつつも、有用な癖、ですので、自ら最初に仰ったように、それ自体は問題はありません。ただ、そういうことをしようとしているな、ということ別の視点から、ただ気づいていて、その中に溺れていないように、「それも一つのボールだな、『理解しようとしている』とか『体と結びつけようとしている』ということ、しようとしているボールなんだな」という、一つの分別された、区別されたボールとして、のんびりと、余所から見られるような眼差しを保つように、努めていただくとより良いかな、と思います、という感じです。

Q: ああ、質問して、良かったです。全部は分からないですけど……。

A: それは、それは、良かったです。最初のうち、ずっと首を傾げておられる中で話し続けるのも、なかなか……。ああ、首を傾げておられるなあ、と思っていたのですけれども、途中から首の傾げがだんだん縦に動くようになられたようでして、良かったなあ、と思っていました。

Q: ありがとうございます。

A: はい、どういたしまして。

(テープ起こし: e)